

【事例紹介】

秋田・第三の故郷を見つける農家民泊

Find Your Third Hometown Farm Stay in Akita

秋田大学高等教育グローバルセンター准教授 市嶋 典子

ICHISHIMA Noriko

(Akita University Global Center for Higher Education)

キーワード：グリーンツーリズム、地域交流

活動の概要

秋田大学では、2009年より「第三の故郷を見つける農家民泊」を企画・運営してきました。「第三の故郷を見つける農家民泊」は、秋田県内で学ぶ留学生が農業体験を通じ、随一の地場産業である農業と農家の暮らしを体験的に理解するとともに、農家の方の話から、仙北市西木町の魅力を認識し、本活動後も再び同地を訪れるような継続的な関係づくりを目指して実施してきました。本活動は公益財団法人中島記念国際交流財団助成に採択されており、本助成金を予算とすることで、継続して実施されてきました。

「第三の故郷を見つける農家民泊」の開催地である仙北市は、秋田県の東部中央に位置し、岩手県と隣接している地域です。ほぼ中央に水深が日本一である田沢湖があり、東に秋田駒ヶ岳、北に八幡平、南は仙北平野へと開けています。地域の約8割（892.05平方キロメートル）が森林地帯で、奥羽山脈から流れる河川は、仙北地域の水源となっています。総面積は、1,093.56平方キロメートルで、秋田県全体の9.4パーセントを占めています。仙北市は平成17年9月20日に旧田沢湖町、旧角館町、旧西木村が合併し、誕生しました（仙北市、2019）。

「第三の故郷を見つける農家民泊」の活動は仙北市西木町のグリーン・ツーリズムの協賛・協力のもと進められてきました。仙北市西木町のグリーン・ツーリズム西木研究会は、発足以来、積極的に農家民泊を推進してきました。仙北市農山村体験デザイン室（2019）によると、グリーン・ツーリズム西木研究会は、地域の農家が農業体験を要請されたことをきっかけに1979年から始まった体験型修学旅行の受け入れを始めた農家にルーツを持つものであるということです。その後、西木型のグリーン・ツーリズムを自主的に推進しようという目的で1998年に設立され、農山村生活体験の受け入れや

地域の食文化等を研究、伝承するようになりました。グリーン・ツーリズム西木研究会は、「相手をもてなすことだけでなく相手の時間を大切にしながら自分たちも楽しむ、自分たちがいかに訪れた人たちと遊べるか、西木でなければできないことは何かを考えながら活動していること」(仙北市農山村体験デザイン室, 2019) が特徴的です。「第三の故郷を見つける農家民泊」の活動は2009年に始まって以来、ずっとこの仙北市西木町のグリーン・ツーリズムの方達にお世話になってきました。

2018年度に実施された「第三の故郷を見つける農家民泊」の参加者は、秋田大学、秋田国際教養大学、秋田県立大学、秋田工業高等専門学校、ノースアジア大学の留学生、日本人学生および、秋田国際交流協会の外国人研修生でした。留学生、外国人研修生は、中国、台湾、韓国、マレーシア、タイ、ラオス、アメリカ、フランス、オランダ、フィンランド、ルーマニア、ロシア、ブラジル、アルゼンチンの出身者でした。参加者は、日本語が全くできない1年間の交換留学生、日本語学や日本語教育学を専門とする1年間の交換留学生、大学や大学院で専門科目を日本語で学ぶ学部生や大学院生、というように毎回、多岐にわたっています。これらの参加者は農家民宿に3~6名ずつのグループに分かれて滞在しました。ほとんどのグループメンバーは初対面であり、農業体験を通して交流し、関係を深めていくこととなります。農業体験については、受け入れ農家ごとに異なり、「具体的なメニュー化は図らず、季節や天候により刻々と変わる農家の生活全般そのものを体験してもらう」(仙北市農山村体験デザイン室, 2019) こととしています。また、本活動は、同じメンバーで2回、集まるのが特徴的です。2回集まることにより、参加者の間により深い関係性が構築されることが期待されます。2018年には、第1回を11月4日(土)~5日(日)に、第2回を、11月26日(日)に実施しました。開催時期は、毎回、農家の代表者の方と相談し、農家の方達の仕事が一段落した時期であると同時に、冬になる前の活動のしやすい時期、大学の学園祭やテストと重ならない、学生が参加しやすい時期を設定しています。

(1) 第1回目 「農業体験ツアー」

- 1 グループごとに各農家に分かれ農作業を体験
- 2 農家に宿泊し、グループメンバー同士や農家の方々とさらなる交流
- 3 参加者全員で、各農家で留学生と協働で作った料理を持ち寄り、市の指定管理委託施設である「かたくり館」にて昼食会と農作業体験の振り返りを行う



農業体験（野菜の選別）

(2) 第2回目 「収穫感謝祭ツアー」

- 1 第1回目と同じ顔触れで集まり、農家で収穫した米を用いた餅つき大会を開催。その後、地元の農作物やお餅を用いて調理する
- 2 各グループで農業体験ツアーを振り返ってのアルバム作成
- 3 料理を食べながら、交流会とアルバム贈呈を実施



アルバム作り



アルバム贈呈

活動をふりかえって

2009年より実施してきた「第三の故郷を見つける農家民泊」は、今年で10年を迎えました。10年間も続いてきた活動は他にあまり類を見ません。10年も続いてきたのは、受け入れてくださった農家の方達の多大なる協力があったからであると言えます。以下では、筆者が今まで体験した農家民泊を振り返ってみたいと思います。

2014年には、泰山堂のFさんのお宅にお世話になりました。Fさんのお宅では、野菜の収穫や選別を行いました。留学生達は皆、初対面であったこともあり、始めのうちは、ほとんど会話をすることがありませんでした。しかし、農作業を進め、ご夫妻と時間を共にするうちに、次第に学生達の間コミュニケーションが生まれ、緊張感がほぐれていきました。そして、その中心にはいつもFさんの

存在がありました。Fさんは、人と人をつなぎ、参加者の間にあった境界を本当に自然に、さりげなく取り払って下さいました。また、Fさんのお話からは、農家民泊への思いやそれを裏打ちする理念のようなものがヒシヒシと伝わってきました。どのようなきっかけで農家民泊を始めたのか、どのような思いで農家民泊を続けているのかを語って下さいました。Fさんの語りは力強く、胸をうたれました。留学生達もそれぞれ何か感じるものがあったのではないかと思います。活動の最終日、別れの際には、留学生達が、いつまでも名残惜しそうにFさんの元を離れたがらなかったことが印象に残っています。周りを見ると、どのグループでも同じような現象が起こっていました。それぞれが充実した交流を実現させていたことがうかがえました。

2015年には、「くりの木」のSKさんのお宅に宿泊しました。農業体験としては、栗拾い、拾った栗の選別、枝豆、茗荷、菊の花の選別、ゆべし作りに挑戦しました。拾った西明寺栗はどれも大きく立派で、つややかでした。その日の晩御飯は、栗三昧でした。また、菊、茗荷、ユリ根、山菜など、とれたての野菜をおいしくいただきました。農家の方達が心を込めて育てたものを、実際に手に取り、栽培してきたプロセスを知った上で食べると、そのありがたさ、おいしさをしみじみと感ずることができました。留学生と話しながら栗の選別をしていた際には、「なかなか日本人の学生と仲良くなれない」という悩みを聞きました。実は、この類の話はよく耳にします。授業の中では言葉を交わすことはあっても、授業外では話すことはほとんどないとのこと。中には、日本人学生との交流を諦めてしまう学生もいるそうです。もちろん、全ての学生がそうであるとは限りませんが、留学生の間に一度できてしまったマイナスのイメージはなかなか崩れません。しかし、農家民泊の経験は、留学生達のイメージを一新してくれます。農家の方々のあたたかいもてなし、壁を感じさせないコミュニケーションが、「日本人と仲良くなれない」というイメージを更新し、「心が通じ合えた」「ここに来てよかった」という気持ちにさせてくれたのだと思います。

2017年には、SYさんのお宅にお世話になりました。ご夫婦は、農家のそば屋一助というお店を営んでおり、私達は、SYさんのお宅で、おいしいお蕎麦をいただきました。ご主人からは、蕎麦の種播きから、収穫、粉挽き、手打ち、お店に出すまでのプロセスをうかがいました。そこで分かったことは、ご主人が、手間と愛情を惜しみなくかけ、心を込めて蕎麦を作っているということです。また、ご主人のお話からは、地元への深い思いが伝わってきました。自身で育てた野菜、栗、お米、きのこのおいしさ、山々の美しさ、仕事の後の温泉のすばらしさを熱く語ってくれました。また、子供の頃の話、東京で就職し、奥様と出会い、お子さんに恵まれ、ふるさとに戻り、一助を営むに至るまでの人生話はとても興味深いものでした。奥様からは、故郷や東京、仙北市での生活、農家民泊を始めるまでの経緯などをうかがうことができました。薪ストーブを囲んで聞くお二人の話はとても興味深く、魅了されました。農家民泊の魅力の一つは、農業体験のみならず、こういった一人一人の深い人生を知ることができることです。そして、農業に対するプロ意識に触れることができる点です。また、毎

回、感心させられるのは、農家の方達が私達を受け入れてくださる際の場づくりの妙です。農家の方達は、必ずしも、留学生達の母語に精通しているわけではありません。それにも関わらず、留学生のみならず、私にとっても居心地の良い場所を創り出してくれます。言葉が十分ではなくても、なぜか伝わってくるあたたかさ、安心感は、私だけではなく、留学生の多くも感じています。(この点については、市嶋(2014)に執筆しました。興味のある方はこちらをご覧ください。)

2018年にお世話になった里の灯では、野菜の収穫やきりたんぼ作り、トラクターの試運転、民芸品作りなどを体験しました。また、作業の合間に、STさんご夫妻の農業人生を聞くことができました。後に留学生達に感想を聞くと、「全てが理解できたわけではないけど、そのことはそんなに気にならない。農家の暮らしが理解できてとても楽しかった、何よりご夫妻が楽しみながら自分達を受け入れてくれていることがよく分かった」と語っていました。また、ご夫妻も多様な背景を持つ留学生の経験や話を聞くのを楽しみにしてくれているようでした。奥様は、活動後、「外国の人がたって、入れたことなかったから、すごく緊張、ドキドキ、すごくそういうのがあったよな。でも、来たら、皆さん打ち解けて。ああ、これでいいんだっていう、そういう気持ち。」と話してくれました。また、ご主人は、「この留学生はいろんなことを学びたくて来てるだろうから、俺たちから見れば、私から見れば何、学び取る場所があるんだろうという。だけど、農業に関しては全て、しかも本当に自信があるから、50年も何代も3代も続いているのさ。」と語ってくれました。ご夫妻は、農業従事者としての自信や誇りを持ち、その自信を基に、「これでいいんだ」と確信し、学生達に農業や野菜の知識を伝えてくれたことが分かりました。また、お二人の語りからは、学生達を受け入れることを楽しんでくれていることがヒシヒシと伝わってきました。これは、グリーン・ツーリズム西木研究会のモットーである「相手をもてなすことだけでなく相手の時間を大切にしながら自分たちも楽しむ、自分たちがいかに訪れた人たちと遊べるか、西木でなければできないことは何かを考えながら活動していること」(仙北市農山村体験デザイン室, 2019)を実現していると言えます。何よりもご夫妻が留学生を受け入れることを楽しんでくれていることに大きな意味があると考えます。「第三の故郷を見つける農家民泊」の活動の肝は、このように農作業を通して、お互いを理解しあい、関係を築いていくことにあると言えます。

本活動は、9年前に実施されてから、少しずつ形体を変えながら、現在まで継続しています。このように長期に渡った交流事業はあまり他に類を見なことであると思います。地域交流の問題としては、その地域の担当者が移動になったり、交流のための予算がつかなくなったりすると自然消滅してしまうということが挙げられます。また、大学、行政、地域住民との関係性により、地域交流の内容、質は大きく変わってきます。「第三の故郷を見つける農家民泊」の活動を通して構築された関係性やノウハウは、かけがえのないものです。今後も継続的に本事業が実施できることを願ってやみません。今年も10月12日~13日、11月9日に「第三の故郷を見つける農家民泊」を実施する予定です。また、仙北市の農家の方達の人生の一部に触れることができるのを、参加者一同、心から楽しみにしていま

す。

参考文献

市嶋典子 (2014) 「農業従事者と留学生の接触場面に関する一考察－農業体験活動における調整行動に注目して」『秋田大学国際交流センター紀要』3, pp. 1-13, <http://hdl.handle.net/10295/2370>

仙北市 (2019) 『仙北市の概要』 <https://www.city.semboku.akita.jp/outline/index.html>

(2019年8月1日取得)

仙北市農山村体験デザイン室 (2019) 「グリーン・ツーリズム西木研究会」『仙北市農山村体験デザイン室ブログ』 <https://sembokugt.exblog.jp/15281808/> (2019年8月1日取得)